

# ビデオ 通信

2022年  
6月27日(月)  
No.4580

月・木曜日発行  
月額：¥11,000(税込：¥11,880)  
発行：飯澤 剛  
編集：齋藤 浩一

**ユニ通信社**

〒114-0024  
東京都北区西ヶ原 3-57-17-202  
TEL：03-5422-7515  
FAX：03-5422-7516  
E-mail：vt@uni-press.net

パナソニック映像

## 「8KVR The Beautiful Seasons」を制作

“高解像度 VR”を幅広い用途に提案



### ▽企画制作

パナソニック(株)  
パナソニック映像(株)

### ▽プロデュース・演出

渋谷昌暁

### ▽企画

柴崎文博

▽制作 河野直樹、中村祐子

▽カメラマン 佐藤 洋

▽カメラ助手 志田茂人

▽テクニカル・ディレクター・  
編集 小川仁志

▽エフェクト 石黒一哉

▽MA 高平幸英

パナソニック映像(株)はこのほど、オーバー 8K 撮影による VR 作品「8KVR The Beautiful Seasons」を制作した。同作品は、同社が進めている 8K オーバーの高画質 VR 撮影映像の中から“日本の四季の美しさ”をテーマに、体感度のある移動シーンでまとめたもので、超高解像度 VR カメラを搭載したドローン撮影や、HDR 化などのポストプロダクション技術を駆使し、青空の蔵王・樹氷や観光客のいない京都の街・竹林など「バーチャルだからこそ観られる風景」が体験できる VR 映像となっている。同作品は、5月に大阪府堺市のプラネタリウムで開催された「日本国際観光映像祭 バーチャルツーリズム部門」プレイベントで上映され、最優秀賞を受賞。映画祭実行委員長の尾久土正己氏(和歌山大学 観光学部 教授)は「映像の美しさ」が飛び抜けていた。非常に高い技術を持ち、バーチャル映像の特徴をよく知っている人が、良い機材により、最適な季節・天気・時刻をしっかりと捉えて撮影することで、美しい瞬間を記録できている。現時点において非常にレベルの高いバーチャル観光映像と高く評価している。同社では“VRには高解像度が必要”をコンセプトとして、約3年前からVR映像の制作に取り組んでおり、その経験とノウハウを駆使してパナソニックの新しいVRグラスの開発にもコンテンツ面から協力している。今後は、観光、イベント、スポーツなどを始めとする幅広いエンターテインメント領域において“高解像度VR”の活用を提案していく。なお、「8KVR The Beautiful Seasons」は、パナソニック映像のWebサイト(<https://group.connect.panasonic.com/pvi/>)で視聴できるほか、29日～7月1日に東京ビックサイトで開催される「ライブ・エンターテインメント EXPO」同社ブースでも体験できる。



### パナソニック映像における 8KVR の集大成に

「8KVR Beautiful Season」を制作した経緯について、パナソニック映像㈱ 執行役員テクニカルグループ グループマネージャーの渋谷昌暁氏は〈パナソニック映像では、パナソニックによるVRグラス開発への技術協力を発端として、約3年前から高画質VR映像に取り組んでいます。みなさんが気軽にVR映像を作っている中で、当社では「映像の美しさ」「高画質」などにこだわって作することをコンセプトとしており、HDRなどで没入感を高めるため、一般的に使われているようなVRカメラではなく、オーバー8KのVRカメラを用いた高解像度・高画質の実写系を制作する取り組みを始めました。当初は複数のLUMIXをリグで組み合わせて撮影していましたが、最近ではInsta360「TITAN」を使用しています。「8KVR Beautiful Season」は、これまで3～4年かけて様々なノウハウと経験で撮り貯めてきた8KVR素材を元にして、“日本の四季”という切り口で、しかも移動感のあるシーンだけを集めてまとめた、「当社における8KVRの集大成」とも言える作品です〉とする。

また、8KVRについて、クリエイティブ・ディレクショングループ グループマネージャーの柴崎丈博氏は〈8K以上で撮影することによってVRゴーグルで観る段階でHD相当になりますから、「VRは8Kから」と考えています。また、撮影する場所や時間、カット割りなど、当社がパナソニックの高画質デモ映像などを手がけてきた経験をベースにした“演出”が入ることに加え、シーンごとの見どころに関する勘所をキチンと捉えて作ることで、映像のクオリティに大きな違いが出てきます。さらに、解像度が8Kになるだけで、撮影に関する全ての要素がヘビーになってきます。TAITANをドローンに載せて飛ばすだけでも、磁場や振動の影響など、実際に飛ばしてみなければ

わからないことが山ほど出てくるため、トライアンドエラーを繰り返しながらオーバー 8K での撮影を続けています」としている。

### コロナ禍の日本だからこそ撮影できた映像も

パナソニック映像では現在、トータルで 1～2 時間分、撮影場所は 20 ヶ所分の 8KVR 素材を有している中で、「8KVR Beautiful Season」は京都と蔵王の映像を中心に構成されている。

京都では「コロナ禍だからこそ撮影できる映像」となっているという。

渋谷氏は「京都の撮影では「没入感はあるけど、現実感がない不思議な世界」をコンセプトに置きました。特に竹林、清水寺の参道、伏見稲荷の千本鳥居など、視聴者の目線と同じアングル映像においては、「観光客が沢山集まりやすい場所なのに、人がいない」という、今では絶対に見ることができない風景を捉えています」。柴崎氏は「五重塔を越えていくシーンなどは、普段ドローン撮影をしている目から見てもかなり攻めていると思います」と語る。

一方、蔵王の樹氷では「リアルでは観ることができない体験」を狙いとしている。

渋谷氏は「現地入りした日はたまたま晴れていましたが、気温が低いと機材の耐久性が落ちてしまいます。朝一番で標高 1736m の蔵王・地藏山に登り、撮影に最適なポイントを探し出し、ドローン組み立ても含めて 1 日で撮影しました。雪の白と青空のコントラストを表現するため 10bit

### バーチャルでトラベル体験できるコンテンツが集結

「日本国際観光映像祭 バーチャルツーリズム部門」は、今年で第 4 回を迎えた日本国際観光映像祭の新たな取り組みとして設けられたもの。2023 年以降の第 1 回正式開催を目指し、5 月 17 日に大阪府堺市のソフィア・堺（堺市教育文化センター）でイベントが行われ、バーチャル観光映像をプラネタリウムで上映、VR や観光の専門家が未来の観光について議論を行った。コンペティションには 41 作品のエントリーがあり、「8KVR The Beautiful Seasons」が最優秀賞を受賞したほか、吉住千亜紀賞、メタバース賞、バーチャル体験賞、カメラポジション賞、VR 観光情報賞が決定した。

今回のイベントについて、事務局長をつとめる小柴恵一氏（㈱ G1 company 代表取締役）は「7 年前にオリンピック組織委員会に出向した時、競技映像を配信してプラネタリウムで上映する企画をプロデュースし、全国で 8 館のプラネタリウム会場で計 1000 人弱を集めました。当時から国立大学で唯一の観光学部を持つ和歌山大学の尾久土正己教授とつながりがあり、アジアでは唯一の国連世界観光機構 (UNWTO) が認める観光映像祭「日本国際観光映像祭」の一部門として「バーチャルにトラベルを体験できるコンテンツ」を集めた「バーチャルツーリズム部門」を新設することになりました。第 1 回開催に向けた部門設定などを決めるためのノウハウ作りやプロモーションを目的に「イベント」を開催しました。今回は、「通常なら VR ゴーグルを装着して楽しむ VR 映像をプラネタリウムのプロジェクターで投影するとどのように見えるか」に挑戦しました。尾久土先生の調べでは、観光映像に絞らんだドームを使って上映する映像祭は初めて」と説明する。

同部門には、制作プロダクションを中心に 41 作品のエントリーがあったという。小柴氏は「エントリーに関するやり取りの中で、「特定の施設向けなので公開できない」と断られることも多く、実際にはもっと沢山のバーチャル観光映像があると考えています。この映像祭に出品するメリットが必要だと感じました。VR コンテンツを観光プロモーションに活かす取り組みが進み、事例が多くなれば、自治体からの発注も増えると思います。また、バーチャルツーリズムはオーバーツーリズム問題へのソリューションでもあると思います。アフターコロナで観光客が集中することによる環境破壊が心配される。現地には行かないものの、同じものが近くのプラネタリウムで体験できる。また、天気が悪い日には晴天の映像が観られる。それによって観光の平準化に寄与できるのではないかと考えています」と話している。

◇日本国際観光映像祭 公式サイト <https://jwtf.world/>



渋谷昌暁氏（左）に最優秀賞の賞状を手渡し  
小柴恵一氏（右）

ドローンを駆使した撮影風景、



で撮影し、HDR化を視野に入れた撮影を行いました。本当は10回以上ドローンを飛ばしたかったのですが、撮れたカットはたった3カットでした。あの樹氷が作られるのは蔵王とドイツだけだそうです。だから、世界的にも非常に珍しい景色が撮影できたと思っています。低温下での機材の調整などもあって、キチンと飛んで回ったのは3回だけ。また、蔵王の上空は磁場が不安定で、撮影には苦心しました」と振り返る。

VR映像の制作では不可欠なスティッチングについて、渋谷氏は「TITANのオートスティッチング機能にはやはり限界があるため、当社の3Dエディターはそれをいかにカバーしながら違和感なく見てもらえる映像するためのノウハウを有しています。編集では、HMDで確認して修正を重ね、レンダリングも含めて相当の時間がかかります。最終的に編集には1週間～10日間かかりました。また、撮影条件だった伏見稲荷の鳥居の裏側にある寄進者の名前を全て消す作業は、短いカットですが一番苦労したポイントかも知れません。単に高解像度だから美しいのではなく、細かい部分へのこだわりが2分間の映像に詰め込まれています」と渋谷氏。柴崎氏は「カメラ技術だけでなく「その被写体をいつ撮れば一番キレイなのか」といった運用面についても、高画質・高解像度のデモ映像をずっと撮り続けてきたからこそその経験値が生きていると考えています」と話す。

## VRの世界は8Kから

VRを活用した「バーチャルツーリズム」は、リアルな旅行の代替だけでなく、リアルではできない体験を可能とする。また、高解像度化やHDRの活用によるリアリティや没入感は、観光市場に対する大きな訴求ポイントにできるのではないかと。

渋谷氏は「HMDの解像度が上がっていく分だけ没入感が高まっていくことで「VRコンテンツは8Kが当たり前の時代」が来るのではないかと考えています。その時に、8KVRの技術とノウハウを持った当社のアドバンテージや信頼感が高まっていけばと考えています。観光以外で高解像度VRが求められる分野としてはスポーツや音楽などライブイベント関係。昨年の世界的なスポーツイベントでもVR撮影を行っています」と語る。一方、柴崎氏は「VRは8Kから」と考えています。「VRの世界は8Kベースが当たり前」になることで体感度や没入感がさらに上がっていくからこそ、VRであることの意味が出てくる。リアルな旅行体験ができない人への代替として機能するものとして、観光市場は有望だと考えています。また、当社は実写撮影だけでなく、CGによるVRも手がけています。「高解像度の実写」「CGによる全く存在しない世界」の両輪でVR事業を進めていきたい」と話している。



渋谷昌暁氏(左)と柴崎丈博氏(右)